

明石の君をめぐる「::人」表現

倉 田 実

はじめに

筆者は、ある語、または、一連の幾重にも続く修飾語を「人」で受けて形成される膠着性・凝集性の強い表現、たとえば「をかしと聞きおきたまひし人」などという表現に着目した論を積み重ねてきた。本稿でも引き続き、この「::人」の形をとる表現のうち、明石の君をめぐる用例についての検討を行ってその表現性を考えていきたい。前稿までを併せて参照していただけたら幸いである。

一 「明石」巻——むつごとを語りあはせむ人

明石の君に対する「::人」表現は、用例①「この人」という形で「若紫」巻に一例（270頁）あるだけで、「明石」巻から本格的に使用されていくことになる。そして、物語の展開に応じて、「::人」表現は多様に変奏されていくことになるが、まずは、二例目の用例がある段から検討を始めたい。

明石の入道、行ひ勤めたるさま、いみじう思ひすましたるを、ただこのむすめ一人をもてわづらひたるけしき、いとかたはらい
たきまで、時々もらし愁へ聞こゆ。③御心地にもをかしと聞きお
きたまひし人なれば、かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、さ

るべき契りあるにやと思しながら、なほかう身を沈めたるほどは、行ひよりほかの事は思はじ、都の人も、ただなるよりは、言ひしに違ふと思さむも心恥づかしう思さるれば、気色だちたまふことなし。

（明石巻271頁）

光源氏が明石の地に移ってまもなく、明石の入道は「むすめ一人」のことを話題にするようになるが、それを受けて、語り手は光源氏の内面に立ち入ってその「むすめ」——明石の君のことを、②「御心地にもをかしと聞きおきたまひし人」とすることになる。光源氏は、明石の君を美しい既知の人としてるのであるが、以前に美しい人が明石の地にいると聞いたのは、周知のように「若紫」巻の北山の段であった。明石の君を「御心地にもをかしと聞きおきたまひし人」とすること、光源氏が明石一族と交渉を持つようになる「明石」巻の時点において、物語は明確に「若紫」巻を想起させようとしていることになる。もともと、「須磨」巻で、すでに北山の地で明石一族のことを光源氏に語った良清を持ち出して、「若紫」巻との連繫を計っていた（201頁）ので、光源氏の意識においても「若紫」巻との連繫を計っているということになる。

物語は意図的に「若紫」巻を想起させ、連繫させようとしていることになるが、従来は、「若紫」巻での明石一族への言及は「須磨」巻以降の伏線とされていた。しかし、伏線ということで片付けるのでは

なく、明石一族への言及が、なぜ「若紫」巻でなければならなかったのかを問わなくてはならないであろう。そこでまず想起されるのは、

したがって「若紫」巻では、明石一族の基本的な設定が明確に示されており、「明石」巻は、当然その内容を受けていくことになる。「若紫」巻で良清が語った次のような語り口に注意しておきたい。

良清「近き所には、播磨の明石の浦こそなほことにはべれ。何のいたり深き隈はなけれど、ただ海のおもてを見わたしたるほどなん、あやしく他所に似ず、ゆほびかなる所にはべる。かの国の前の守、新發意のむすめかしづきたる家、いといたしかし。大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、交じらひもせず、…。

(若紫卷276頁)

光源氏の縋心を満たす地として、良清は明石の浦を持ち出していたが、その地の説明はすぐに「かの国の前の守」の話に転じていた。そして、良清はその話の最後を、「後の世の勤めもいとよくして、なか法師まざりしたる人になんはべる」と明石の入道のことと結んでなかな法師まさりしたる人になんはべる」と明石の入道のことと結んでなかな法師まさりしたる人になんはべる」と明石の入道のことと結んで

いた。景色の話は、引用部だけであり、ほとんどが明石の入道のことになっていく。良清のレベルに立てば、明石の入道の財力とその「むすめ」が気になるからということになるが、物語の意図では、明石の入道のことを前面に押し出す必要があったからということになる。引用は省略するが、良清は、明石の入道の基本的設定された人となりであることを明確に語っていたのであった。

「明石の君物語」という視点ではなく、「明石一族の物語」という
 広がりで見えなければならぬということ、すでに指摘されてい
 る。このことは、すでに「若紫」巻で明瞭なのである。明石の君のこと
 とだけが中心的ではなく、まずは、その人生を領導する父のことが
 が詳細に語られていることが、このことを証しだてている。当面、こ
 の「明石一族の物語」という視点を念頭に置きながら、検討を続けて
 いきたい。

物語の興味は、まず光源氏と明石の入道の交渉が主眼になる。明石の地に移って間もなく、光源氏はその明石の入道から用例②「をかしと聞きおきたまひし人」のことを改めて聞いたのであった。明石の君に対する「…人」表現は、こうして展開し始めるが、「明石」巻あたりの局面的な呼称でより重要なものは、すでに引用した「若紫」巻の部分にも使用されていた「むすめ」という指示の仕方である。このあたりの様相をまず整理しておきたい。この巻の明石の君に対する「…人」表現をまず上げれば、次の六例になる。⁽⁴⁾

②「源氏」御心地にもをかしと聞きおきたまひし人

- | | | |
|---|------------------|---------------|
| ③ | 「入道」この人 | 心・明石巻
227頁 |
| ④ | 「源氏」かかる人 | 会・明石巻
235頁 |
| ⑤ | 「源氏」むつごとを語りあはせむ人 | 歌・明石巻
246頁 |
| ⑥ | 「源氏」かの飽かず別れし人の | 地・明石巻
261頁 |
| ⑦ | 「源氏」その人 | 地・明石巻
262頁 |
- これに對して、その他の呼称の用例数は、次のようになる。
- | | | |
|---|----------|---------------------------|
| ア | むすめ | 5例 (224・227・234・238・245頁) |
| イ | 女の童 | 1例 (235頁) |
| ウ | 正身 | 3例 (228・243・259頁) |
| エ | あやしうまねぶ者 | 1例 (232頁) |
| オ | これ | 1例 (235頁) |
| カ | 女 | 4例 (240・250・252・256頁) |

「若紫」巻では、「むすめ」が2例（276・277頁）と「妻子」が1例（277頁）、「須磨」巻では、「むすめ」が2例（201・203頁）と「吾子」が1例（201頁）であり、「むすめ」「女の童」「妻子」という系列が意図的に使用されている。そして、「濡標」巻以降はこの系列の呼称はない。

このように「むすめ」が強調されるということは、その親が問題にされるということに他ならない。「若紫」巻で「かの国の前の守、新発意のむすめかしづきたる家」とまず紹介されたように、明石の君は、明石の入道の「むすめ」として、まず物語に位置しているのである。このことは明石の君が明石一族という視点でもって捉えられねばならないことを示している。一族の長、明石の入道の、家の再興という悲願を明石の君は一身に受け、一族の論理を生きねばならないことを強いられるのである。

続いて、この巻の「…人」表現の問題に戻りたい。先の②「御心地にもをかしと聞きおきたまひし人」は、光源氏の明石の君に傾斜する心情をもたらし働きがある一方で、「若紫」巻を想起させる方法的な語りでもあった。続く用例③「この人」は、明石の入道が「むすめ」への期待を打ち明ける時のもので、これを受けて光源氏が④「かかる人」とすることになる。須磨の地にいた時、「かかる人ものしたまふとはほの聞きながら、いたづら人をば、ゆゆしきものにこそ思ひ棄てたまふらめ、と思ひ屈し」ていたと光源氏は、明石の入道の間わず語りを聞いて返答している。先の「をかしと聞きおきたまひし人」と同じく、「若紫」巻を想起させる指示の仕方である。

用例⑤は、明石の君との「結婚」に際しての贈歌、「むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと」にあるもの。この「むつごとを語りあはせむ人」は、直接明石の君を指示しているわけではないが、そのような人として明石の君を期待していることを表している。光源氏のこうした求愛の歌によって「結婚」が成立していくが、それなりに両者が親しみ合うことによって、絆は深まっていくこ

となる。

光源氏の都への帰還がかない、いざ帰京してみると、それまで明石の君との「結婚」を意識的に妨げていた紫の上を前にして、今度は逆に⑥「かの飽かず別れし人」のことが思い浮かんでくる。しみじみとした両者の交渉は、ここで追うことはしないが、それは歌の贈答を軸に展開されていた。光源氏が明石の君を「かの飽かず別れし人」と捉えることによって、両者の交渉は継続するだろうことを暗示するのである。だから光源氏は、しみじみと⑦「その人」ことを紫の上に語ってしまふことになる。

以上、「明石」巻の「…人」表現を追ってきたことになる。光源氏にとって、明石の君はまず②「御心地にもをかしと聞きおきたまひし人」であったが、明石の入道の期待に沿うかのように⑤「むつごとを語りあはせむ人」と意識されてきた。そして、「結婚」が成立し、都に戻ってからは、⑥「かの飽かず別れし人」と追憶され、これから物語で地歩を占めることが暗示されるのである。呼称としては、「むすめ」と指示されるのが主題的だが、「…人」表現では、それなりにステップを踏んで光源氏との関係性が捉えられるのである。以下、明石一族の物語展開に即して明石の君をめぐる「…人」表現の検討を続けたい。

二 「濡標」巻——かの明石の人

「明石」巻では「結婚」が主要な内容であったが、「濡標」巻では姫君出産が主要となり、光源氏には宿曜の予言によってその姫君が后がねであることを知り、そのために明石一族のことが絶えず念頭に浮かぶことになる。この巻での用例を上げれば、次のようになる。

- ⑧「源氏」かの人 心・濡標巻276頁
- ⑨「源氏」この人 会・濡標巻282頁
- ⑩「語り」かの明石の人 地・濡標巻292頁

⑪「語り」田舎人

⑫「語り」かの人

地・濔標卷293頁
地・濔標卷298頁

この巻では、「かの人」とする用例が二例あるが、これは都と明石の地との距離に応じた指示の仕方と言うことになり、用例⑩・⑪と係わることになる。

用例⑨で、「かの人」とする指示の仕方ではないはずなのに「この人」としているのは、紫の上の嫉妬を呼び起こす段である。光源氏は、明石の姫君が誕生したことを紫の上に知らせることになるが、そのために紫の上は心中穏やかではない。しかし、紫の上としては、「よろづの事すさびにこそあれと、思ひ消たれまふ」というようにそれなりに納得したのに、光源氏がさらに続けて「この人をかうまで思ひやり言ふとは、云々」と明石の君とのことを具体的にしみじみと語り出すに及んで、紫の上は「ただならず思ひつづけ」ることになる。この落差は、一方で光源氏が具体的にしみじみと明石の君とのことを語ったからであるが、つい「かの人」とすべきところを「この人」というように親しみを意味しかねない近称を使用してしまったからでもある。うなにげない「人」表現ではあるが、「この人」と「かの人」を効果的に使い分けている様態を指摘できることになる。

この⑨「かの人」という指示の仕方をより具体的にすれば、用例⑩「かの明石の人」という形になる。光源氏が住吉詣でをする段である。

その秋、住吉に詣でたまふ。願どもはたしたまふべければ、いかめしき御歩きにて、世の中ゆすりて、上達部殿上人、我も我もと仕うまつりたまふ。

をりしも、⑩かの明石の人、年ごとの例の事にて詣づるを、去年今年はさはる事ありて怠りけるかしこまり、とり重ねて思ひ立ちけり。
(濔標卷292頁)

姫君を出産して明石の君親子が尼君を伴って都の近郊大堰の地に移るまで、「明石」という地名によって明石の君が指示されていくこと

になる。「まことや、かの明石には」(明石巻264頁)、「まことや、かの明石に心苦しげなりしことはいかに」(濔標卷275頁)、「かの明石の船」(同298頁)、「かの明石の家ゐ」(絵合巻368頁)、「明石の御方」(松風巻387頁)、「明石には御消息絶えず」(同387頁)という具合であり、「明石の御方」にしてもまだ明石の君を表す固有名詞ではなく、「明石の地にいる御方」の意である。この他には、「子持ちの君」(濔標卷280頁)という重要な指示の仕方と「この女君」(同285頁)「女」(同387頁)「御方」(同394頁)という呼称があるだけであり、大堰の地に移るまでは、これまでの「むすめ」に変わって、「明石」によって局面的に明石の君が指示されるのである。このことを象徴的に示すのが、⑩「かの明石の人」ということになる。

「かの明石の人」という指示の仕方は、当然のことながら、都との距離や落差を言うことになるが、それが極まると次の⑪「田舎人」ということになる。前と同じく住吉詣での段である。

すべて(明石の地で)見し人々ひきかへ華やかに、何ごと思ふらむと見えてうち散りたるに、若やかなる上達部殿上人の、我も我もと思ひいどみ、馬鞍などまで飾りととのへ磨きたまへるは、いみじき見物に、⑪田舎人も思へり。
(濔標卷293頁)

光源氏と供に明石の地に下っていた供人達が、今は華やかに装い、上達部や殿上人達も磨き整えている姿をみるにつけ、明石の地との落差を思わざるを得ない。そうした時、「田舎人」であることが痛切に感じられるのである。だから、「⑫かの人」は過ぐしきこえて、またの日ぞよろしかりければ、幣帛奉る」(濔標卷298頁)という次第にならざるを得ないのである。

このように「濔標」巻の段階では、「かの明石の人」という指示の仕方に象徴的であるように、都との距離や落差によった「人」表現が用いられて、明石の君が示されるのである。こうした在り方が、大堰の地に移ることによって、次に違った表現が使用されることになる。

三 「薄雲」巻——をちかた人

「松風」巻では、姫君も三歳になり大堰移住が主題的になるが、ここでは「…人」表現でもって明石の君が語られることはない。大堰の地に移った後、明石の君を訪問しようとして、紫の上に挨拶する所に一か所、

⑬「源氏」とぶらはむと言ひし人

会・松風巻399頁

という「…」表現が使用されるだけである。

源氏「桂に見るべきことはべるを、いさや、心にもあらでほど経にけり。⑭とぶらはむと言ひし人さへ、かのわたり近く来あて待つなれば、心苦しくてなむ。」

(松風巻399頁)

明石の君に会いに行くための口実として桂を持ち出し、わざとぼかして明石の君を言うことになる。まだ、この時点では明石の君の存在を明確に紫の上に語れない状況を示していることになる。

姫君を紫の上に譲ることが語られる「薄雲」巻に入ると、次のような用例が展開して、明石の君を指示する言い方が、紫の上とも係わっていくことになる。

⑭「明石」数ならぬ人

心・薄雲巻418頁

⑮「源氏」おろかには思ひがたかりける人の宿世

心・薄雲巻423頁

⑯「源氏」とまりつる人

地・薄雲巻424頁

⑰「紫上」をちかた人

歌・薄雲巻429頁

⑱「源氏」をちかた人

歌・薄雲巻429頁

⑲「紫上」をちかた人

地・薄雲巻429頁

⑳「源氏」山里の人

心・薄雲巻455頁

⑭「数ならぬ人」は、明石の君の心内語にある例である。

「⑭数ならぬ人のならびきこゆべきおぼえにもあらぬを、さす

がに、立ち出でて、人もめざましと思す事やあらむ。わが身はともかくても同じこと、生ひ先遠き人の御上もつひにはかの御心にかかるべきにこそあめれ。さりとならば、げにかう何心なきほどにや譲りきこえまし」

(薄雲巻418～419頁)

正妻格に納まっている紫の上のすばらしさに比べると、明石の君は自身をやはり⑭「数ならぬ人」と自己把握せざるを得ない。明石の君の「身の程」意識が、このような把握を強いるのである。そして、「数ならぬ人」と自身を把握せざるを得ないからこそ、姫君を紫の上のもとに託さざるを得ないである。自己を対象化する「…人」表現の例ということになり、同じ把握は「乙女」巻でも行われることになる。

明石の君は自身を「数ならぬ人」と把握せざるを得ないが、しかし、姫君を生んだことによってこれとは別の把握がされることになる。次の⑮「おろかには思ひがたかりける人の宿世」がそれになる。これは、大堰に移って冬になり光源氏が姫君を引取りに出かけたときもので、「人の宿世」で一語とすべき例である。また、この人は、明石の君ではなく姫君を指示しているという説があり、この前後は姫君に関する部分なので、あるいはこの姫君説にした方が良かったかもしれないが、一応用例として上げておく。明石の君とした場合は、皇后の地位も夢ではない姫君を出産した明石の君の宿世のめでたさをいい、また、その明石の君との宿世をかみしめる光源氏の心内を表現することになる。光源氏のただ一人の后がねである姫君を出産したがゆえに明石の君をそれなりに待遇せざるを得ないのであり、その姫君を引き取りに来ているがゆえにその母の苦衷を思いやることになる。そして、姫君を引き取って二条院に戻る時には、「道すがら、⑯とまりつる人の心苦しさを、いかに罪や得らむと思す」(薄雲巻424頁)ことになる。光源氏は、姫君と生き別れの状態になって大堰にとどまった⑯「とまりつる人」明石の君を思いやると、自責の念にかられるのである。

明石の君は姫君と別れて大堰の地にとどまったことで「とまりつる人」とされたわけだが、この形の把握が変奏されると「薄雲」巻で集中的に三例使用される「をちかた人」になる。姫君を引き取った後、年が改まって大堰を訪問しようとして紫の上に挨拶する段である。

姫君は、いはけなく御指貫の裾にかかりて慕ひきこえたまふほどに、外にも出でたまひぬべければ、立ちとまりて、いとあはれと思したり。こしらへおきて、源氏「明日帰来む」と口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり。

紫の上舟とむる⑩をちかた人のなくはこそあすかへりこむ夫と待ちみめ

いたう馴れて聞こゆれば、いとにほひやかにほほ笑みて、

源氏行きてみてあすもさねこむなかなか⑩をちかた人は心おくとも

何ごととも聞き分かで戯れ歩きたまふ人を、上はうつくしと見たまへば、⑩をちかた人のめざましきもこよなく思しゆるされにたり。
(薄雲巻429頁)

この段は、『催馬楽』の「桜人」によった機知的な贈答が主たるところだが、別稿ですでに触れているので簡単にしておきたい。『催馬楽』の「桜人」は、次の通りである。

桜人 その舟止め 島つ田を 十町作れる 見て帰来んや そよや あす帰来ん そよや

言をこそ 明日ともいはいはめ をちかたに 妻さる夫は 明日もさね来じや そよや 明日もさね来じや そよや

「桜人」の歌詞を援用しながら、言語の膠着性によって「をちかた人」という凝集的表现を成立させているが、「うち渡すをちかた人」もの申すわれその所に白く咲けるは何の花ぞも(『古今集』雑体・旋頭歌)という「夕顔」巻でも引例されているこの歌もあり、ある程度定着していた言い回しではあった。ともかく「をちかた人」という

「…人」表現は、ここでは明確に明石の君を指示する言葉になっている。大堰と言う都から離れた遠方の地ということが指定されることになる。また、遠方の地にいるということは、愛の薄い人でもあるというところが暗示されることにもなり、それをもって光源氏が大堰に出かけることが紫の上に許容されるわけである。「薄雲」巻の段階では、「かの明石の人」という言い方が使用されたのを受けて、大堰に移ってからのこの巻では「をちかた人」となるのである。

「遠方の人」という指示の仕方は、次の②「山里の人」という指示の仕方と連動することになる。先の引用の前の部分には、「山里のつれづれをも絶えず思しやれば」とあって、大堰の地は「山里」でもあるのだが、その「山里」で明石の君が示されることになる。「薄雲」巻末は、この部分を受けて「山里の人も、いかになど、絶えず思しやれど、ところせさのみまさる御身に、渡りたまふこといと難し」(薄雲巻455頁)となっており、明石の君は「山里の人」なのである。

「をちかた人」といい、「山里の人」といい、どちらも距離と愛情の薄さをわざと暗示して、紫の上とは一段劣る人としての明石の君をいうことになる。ただ、「山里の人」の場合、この物語が成立した時代には藤原公任などによって「山里」の美が和歌に詠まれるようになっており、清遊の地にいる人ということになって貶称性は弱まっていると見ることもできよう。しかし、これは両義的であり、「あやしき山里」(玉鬘巻114頁)という用例もあり、都から遠いという否定的要素は汲み取るべきであろう。

こうした「薄雲」巻の明石の君に対する「…人」表現を合成する形でおこなわれる用例として、

②「源氏」この数にもあらずおとしめたまふ山里の人

会・朝顔巻483頁

という形がある。二条院の冬の夜、光源氏が紫の上に語る女性評の一節である。

源氏「②この数にもあらずおとしめたまふ山里の人こそは、身のほどにはややうち過ぎ、ものの心などえつべけれど、人よりことなるべきものなれば、思ひあがれるさまをも見消ちてはべるかな。」（朝顔巻483頁）

この部分以前に紫の上が明石の君の身分を貶めて光源氏に語ったという部分はないが、先の引用にあるように「をちかた人のめざましきもこよなく思しゆるされにたり」というところから、「めざまし」と思っていたことは伺えよう。しかし、姫君を引き取ってからは、「思しゆるされにたり」という状態であるので、光源氏は紫の上の深層を指摘しているということになる。また、②「この数にもあらずおとしめたまふ山里の人」という言い方は、明石の君が自身を④「数ならぬ人」と把握し、光源氏が②「山里の人」とした二つを合成したものであることは確かである。したがって、「朝顔」巻のこの表現は、「薄雲」巻の明石の君の段階を集約的に語っていることになる。

四 「乙女」巻——なほあやしうめでたかりける人

「乙女」巻になると明石の君のことが、内大臣家でも問題にされることになる。この巻は、夕霧の教育問題に始まって雲居雁との幼な恋が語られていくが、極めて政治的な力学が背景に据えられている。すなわち、内大臣家の切り札であった弘徽殿女御の立后が挫折し、梅壺女御が冊立されるという状況が語られ、太政大臣光源氏家との確執が示されている。だから、次の后がねと目される雲居雁の夕霧との結婚が、内大臣に反対され、女子の在り方が内大臣家で問題になることになる。そうした時、光源氏のたった一人の姫君を生んだ明石の君も話題に上ってくる。この巻での用例を上げれば、次のようになる。

②「内大臣」太政大臣の山里に籠めおきたまへる人

会・乙女巻28頁
③「内大臣」山がつにて年経たる人 会・乙女巻28頁

④「大宮」なほあやしうめでたかりける人 会・乙女巻29頁
⑤「大宮」事もなかるべき人 会・乙女巻29頁
⑥「内大臣」かう言ふ幸ひ人 会・乙女巻29頁
⑦「源氏」おぼつかなき山里人 地・乙女巻70頁
⑧「明石」数ならぬ人 心・乙女巻77頁

七例の内、五例が内大臣家のものになり、それらは集約的に示されている。やや長くなるがその部分を引用したい。

所どころの大變どもも果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかにぬるころ、時雨うちして萩の上風もただならぬ夕暮に、大宮の御方に内大臣参りたまひて、姫君渡しきこえたまひて、御琴など弾かせたまつりたまふ。宮はよろづの物の上手におはすれば、いづれも伝へたまつりたまふ。内大臣「琵琶こそ、女のしたるに憎きやうなれど、らうらうじきものにはべれ。今の世にまことしう伝へたる人、をさをさはべらずなりたり。何の親王、くれの源氏」など教へたまひて、内大臣「女の中には、②太政大臣の山里に籠めおきたまへる人こそ、いと上手と聞きはべれ。物の上手の後にははべれど、末になりて、③山がつにて年経たる人の、いかでさしも弾きすぐれけん。かの大宮、いと心ことにこそ思ひてのたまふをりをりはべれ。他事よりは、遊びの方の才はなほ広うあはせ、かれこれに通はしはべるこそかしけれ。独りごとにて、上手となりけんこそ、めづらしきことなれ」などのたまひて、宮にそそのかしきこえたまへば、大宮「柱さすことうひうひしくなりけりや」とのたまへど、おもしろう弾きたまふ。

大宮「幸ひにうち添へて、④なほあやしうめでたかりける人なりや。老の世に、持たまへらぬ女子をまうけさせたまつて、身に添へてもやつしあたらず、やむごとなきにゆづれる心おきて、⑤事もなかるべき人なりとぞ聞きはべる」など、かつ御物語聞こえたまふ。内大臣「女はただ心ばせよりこそ、世に用ゐらる

るものにはべりけれ」など、人の上のたまひ出でて、内大臣「女御を、けしうはあらず、何ごとにも人に劣りては生ひ出でずかし、と思ひたまへしかど、思はぬ人におされぬる宿世になん、世は思ひの外なるものと思ひはべりぬる。この君をだに、いかで思ふさまに見なしはべらん。春宮の御元服ただ今のことになりぬるを、と人知れず思うたまへ心ざしたるを、[㊤]かう言ふ幸ひ人の腹の后がねこそ、また追ひすがひぬれ。立ち出でたまへらんに、ましてきしろふ人ありがたくや」とうち嘆きたまへば、大宮「などかさしもあらむ。この家にさる筋の人出でものしたまはでやむやうあらじ、と故大臣の思ひたまひて、女御の御事をも、ゐたちいそぎたまひしものを、おはせましかば、かくもてひがむる事もなからまし」など、この御事にてぞ、太政大臣も恨めしげに思ひきこえたまへる。

(乙女巻28頁30頁)

引用を便宜的に二段に分けたが、まず前半は、琴にまつた話から琵琶の上手である明石の君に言及されている。琴にまつた話は、后がねとしたい雲居雁を前にしたものである。当然音楽教育という観点があることになるが、話題は太政大臣家のことに及ぶこととおのずと政治向きのことにも展開し、後半に至ることになる。

明石の君のことを軸にみると、まず、琵琶を「今の世にまことしう伝へたる人」がなかなかいないという現状から、[㊤]「太政大臣の山里に籠めおきたまへる人」の技量が推奨されることになる。光源氏の待遇の仕方をいうことが、そのまま明石の君をいうことになる。「人」表現によるこの指示の仕方は、「山里に籠めおき」という措辞があるように決してその人までを推奨したものではない。「山里に籠めお」かれるような人は、当然身分は低いはずであるということまで意味されることになる。だから、次の[㊤]「山がつにて年経たる人」とする出自・境遇をいうことでもって明石の君が指示される言い方が行われてくる。「山里」よりもっと劣るのが「山がつ」である。現在は、光源氏に「山里」に籠めおかれているものの、出自をたどれば「山が

つ」なのである。「薄雲」巻の段階では、光源氏と紫の上だけで問題にされていた明石の君のことが、こうして人々の知るところとなつて、言及されるわけである。「山里」「山がつ」などという語でもって構成されるこの二例の「人」表現は、明石の君に対する貶辞を内在してしまっていることになる。内大臣の発言は、琵琶の技量を推奨することに主眼があったわけだが、おのずと明石の君の出自・境遇までが言い当てられてしまっているのである。

後半の話題は、大宮がその明石の君の現在を指摘することから、后がねとしての女子養育のことに及んで、内大臣家と太政大臣家との確執に及ぶことになり、こうした話題の中で、おのずと明石の君の位置が鮮明になってくる。大宮は、明石の君を[㊤]「なほあやしうめでたかりける人」とするが、これは女の視点からのもの言いである。この部分の前に「幸ひにうち添へて」とあるように、光源氏のたった一人の姫君まで生んだ境遇を言い、そうだったのもすばらしい人柄のせいとするのである。そして、その人柄の推奨が、そのまま「人」表現となつて明石の君を指示する言葉になっている。人柄の実際は、さらに述べられて行き、自身の身分の低さゆえに紫の上に娘を託しまでして娘の将来を考える心がけが言われることになる。だから、[㊤]「事もなかるべき人」と、欠点のない申し分のない人として明石の君が言われる噂を支持することになる。大宮としては、女の立場から明石の君の生き様を肯定するのであり、また、我が身を犠牲にしてまで娘の将来を案じる心掛けに賛意を表するのである。こうした大宮の発言によって明石の君の対世間的な評価が語られるのであり、その人柄の推奨は、今後の明石の君に対する「人」表現にも及んでいくことになる。

大宮の発言は、おのずと女子養育の在り方に及んでいた。内大臣の、弘徽殿女御中宮冊立の失敗に話題が引き続いていく。内大臣としては、現在雲居雁が弘徽殿女御の次に持つ切り札になるが、その先行きの懸念が嘆息されることになる。[㊤]「かう言ふ幸ひ人」所生の姫

君が、自家の繁栄を疎外する人として意識されるのである。内大臣の嘆息は、自ずと后がねの母明石の君の境涯を照らし出すのである。

明石の君における「人」表現の多くは、貶辞として機能していた。しかし、この巻当たりから、人柄を推奨する形で構成されていくようになる。大宮の発言にそれは顕著であり、また、内大臣が「幸ひ人」としたところにも明らかである。それというのも、明石の君が光源氏のたった一人の姫君を生んでいるからであり、姫君が話題になることにおいての推奨ということになる。明石の君だけが問題にされる場合には、ふたたび㉔「おぼつかなき山里人」という形で据えられ、また、明石の君自身も自らを再度㉕「数ならぬ人」と卑下するのである。

五 玉鬘十帖——北の町にものする人

「乙女」巻で四方四季の町からなる六条院が完成すると、北の町（冬の町）に入った明石の君への呼称として「明石の御方」が定着してくる。先に触れたように、「松風」巻で一例だけあったこの呼称は、その時点では「明石の地にいる御方」の意であった。それが、六条院が舞台になるに及んで明石の君を指示する固有名詞となっていく。玉鬘十帖での「人」表現を除く明石の君に対する呼称は、

㉔ 明石の御方 5例 (81・130・143・202・268頁)

㉕ 明石 1例 (120頁)

㉖ 明石のおもと 1例 (229頁)

㉗ 北の殿 3例 (120・139・175頁)

㉘ 初音指しみたまふべき方 1例 (140頁)

という次第になり、「明石の御方」及び「北の殿」が定着していることが知られる。これらに対して、「人」表現は、次の二例のみである。

㉙ 「源氏」北の町にものする人

会・玉鬘巻120頁

㉚ 「明石」年月をまつにひかれて経る人 歌・初音巻140頁

六条院に基づいた呼称である㉙「北の町にものする人」は、先の㉚「北の殿」と呼応する「人」の形だが、これは、玉鬘の六条院入りをひかえて、この間の事情をあれこれと紫の上に語る段のものである。光源氏は、「夕顔」が世にあらましかば、北の町にものする人の列には、などか見ざらまし」というように、つい明石の君を持ち出して玉鬘の母夕顔を説明してしまうのだが、これが紫の上の機嫌をそこねてしまうことになる。紫の上は、「さりとも明石の列には、立ち並べたまはざらまし」と皮肉の一つもいうわけである。

次の用例㉛は、明石の君が姫君に贈った「年月をまつにひかれて経る人」にけふうぐひすの初音きかせよ」という歌のなかの言葉である。

「数ならぬ人」であったがゆえに、娘を手放さざるを得なかった明石の君は、娘恋しさに自身を㉜「年月をまつにひかれて経る人」とするのである。小松引きの新年の行事にちなみ、また、松に姫君の成長を託してその将来を待つ身をいうことになるが、明石の君にとって、姫君の成長——具体的には春宮入内以後に切り展かれていく皇妃として歩みが生きがいとなる。そうした秘めた思いが、おのずとこの「人」表現をとらせていることになる。

玉鬘十帖での「人」表現は、明石の君のこの十帖における比重の低さ、すなわち明石の君物語の停滞によって、「北の町にものする人」とする新造六条院にちなんだ「人」表現があるものの、これ以前の段階から進展する様子はほとんどないようにみえる。しかし、「少女」巻で見たように、明石の姫君が有力な后がねと目される発言が内大臣家でなされたのと同じく、明石の君において姫君の将来を待みにする「人」表現が行なわれるようになる。そして、姫君が成長するに及んでは、新たな表現を獲得していくことになる。次は、その段階を示す「藤裏葉」巻に移りたい。

六 「藤裏葉」巻——あやしくあらまほしき人の ありさま

「藤裏葉」巻で明石の姫君は、一族の期待通り春宮に入内することになるが、それに応じて実母明石の君が格上げされることになる。これまで明石の君に対する「母君」という呼称は、「薄雲」巻で一例（425頁）だけしか使用されなかったのが、「梅枝」巻（405頁）で復活されたのに続いて、この巻でも使用され、以後「若菜上・下」巻で多用されていく。春宮の女御の実母として、それなりに重んじられなければならないのである。

「…人」表現に関しては、わずか一例だけ認められるが、「…人の…」という表現を参照すれば、次の通りになり、明石の君が「母君」とされることと見合うことになる。

③①「紫上」かの人 心・藤裏葉巻440頁

③②「語り」心及ばぬことはたをさをさなき人のらうらうじさ 地・藤裏葉巻444頁

③③「語り」あやしくあらまほしき人のありさま

地・藤裏葉巻444頁

一例だけの「…人」表現である③①「かの人」は、紫の上が、明石の君を、明石の姫君の後見役として定めようとする時のもので、そうした決定に際しても紫の上にとつての明石の君は、「かの人」というように距離を置く人になることを示している。

参照例である③②「心及ばぬことはたをさをさなき人のらうらうじさ」は、「人のらうらうじさ」で一語とすべきもの。「人」だけに係るわけではないが、検討しておきたい。ここでは、姫君入内に際しての明石の君の「心及ばぬことはたをさをさなき」といった行き届いた才気ある人柄が推奨されている。明石一族は姫君入内に命運をかけてきたのであり、明石の君の思いとて同じである。明石の君は、姫君に傷になるようなことは極力避けて自身を律してきたのであるが、それが

世間の目にもすばらしいことにうつるのである。だから、明石の君を格段に持ち上げる表現ということになる。明石の君は、姫君によってこのように格上げされるのである。

続く③③「あやしくあらまほしき人のありさま」は、対紫の上との関係における明石の君の身の処し方を推奨するもの。両者の関係が理想的になっても、「さり」とてさし過ぎものの馴れず、侮らはしかるべきもてなし、はた、つゆなく」といった態度が同じように推奨されることになる。かつて、大宮が③④「なほあやしうめでたかりける人」とした評価が、改めて浮上しているのである。大宮は、光源氏のたった一人の姫君を生み、紫の上に託すに至った経緯から、明石の君の人柄を推し量ったのであったが、姫君入内という盛儀の時点であるからこそ、それが確認されるのである。

「藤裏葉」巻の「…人」表現は、厳密には「かの人」の一例があるだけだが、参照例では、格段に明石の君は格上げされるのであり、この事情は、物語第二部に引き続いていくことになる。第二部に入って光源氏世界は大きく変容するものの、明石一族は引き続き繁栄に向けての路線を歩むのである。

七 「若菜」巻——心の底見えず際なく深きと ころある人

「若菜上・下」巻における明石一族に関する膨大な語りの量からすれば、明石の君に対する「…人」表現の用例は三例で、きわめて少ない。

③④「典侍」かかる契りことにものしたまひける人

心・若菜上巻102頁

③⑤「源氏」心の底見えず際なく深きところある人

会・若菜下巻201頁

③⑥「紫上」さばかりめざましと心おきたまへりし人

地・若菜下巻202頁

「若菜下」巻における用例は、六条院女寮終了後のいわゆる「述懐」場面のもので、明石一族が中心的に語られる段のものではない。

この明石の君に対する用例の少なさは、もうすでに一族の将来が見通せる段階に至っていて、もうあれこれ明石の君を「人」表現でもって語る必要がなくなっていることを示している。すでに、物語はこれまでにわたって様々に明石の君を語ってきており、人物造型においても、また物語の進展においても、さほど明石の君における展開はなくなっている。明石一族の物語は先に見えるルールを進んでいるといってもよいのである。

明石一族の物語は、先が見えているといっても、しかし、それなりの段階を踏んでいかななくてはならない。「若菜上」巻では、まず明石の女御出産がポイントになる。明石の君においては、その場面でいかに振る舞うかが問われてくる。

むつかしげにおはするほどを、(紫の上は)絶えず抱きとりたまへば、まことの祖母君(明石の君)は、ただまかせたてまつりて、御湯殿のあつかひなどを仕うまつりたまふ。春宮の宣旨なる典侍ぞ仕うまつる。御迎湯におりたちたまへるものとあはれに、内々のこともほの知りたるに、すこしかたはならばいとほしからましを、あさましく気高く、げに④かかる契りことにものしたまひける人かなと見きこゆ。
(若菜上巻101～102頁)

周知のように明石の君は、女房格の行方介添え役「迎湯」を勤めているのだが、そうしたことを事情をよく知る典侍が見ていることになる。実母でありながら、実子の御産に女房格でしか奉仕できないのに、典侍は、明石の君に対して「あさましく気高く」ある人様を注視し、④「かかる契りことにものしたまひける人」と把握している。この介添え役であることと人柄との落差は、典侍にとっては落差ではない。『落窪物語』でも明らかのように、「典侍」という地位は、一般女房のなり得る最高の地位である。その典侍においても、介添え役になつていようと女御の母、皇子の祖母という明石の君の立場は羨望を禁

じ得ないものである。そして、明石の君は「あさましく気高く」ある人様である。受領階級出身でありながら、こうした境遇に納まっている明石の君は、多分同じ出自の典侍にとって「かかる契りことにものしたまひける人」とうつるのは、当然なのである。典侍の視線を通じて、明石の君の現在の意味を語っていることになる。明石の君は、娘の出産に際して賢明に処しているのである。そして、典侍の把握の仕方は、おのずと明石の君の境涯を照らし出しているのである。

明石の君のこうした身の処し方は、「若菜下」巻で、光源氏と紫の上との語らいの話題にもなることになる。

源氏「内裏の御方の御後見は、何ばかりのほどならずと侮りそめて、心やすきものと思ひしを、なほ⑤心の底見えず際なく深きところある人になむ。うはべは人になびき、おいらかに見えながら、うちとけぬ気色下に籠りて、そこはかとなく恥づかしきところこそあれ」とのたまへば、紫の上「他人は見ねば知らぬを、これは、まほならねど、おのづから気色見るをりをりもあるに、いとうちとけにくく、心恥づかしきありさまするきを、いとたとしへなき裏なさを、いかに見たまふらん、とつしましけれど、女御はおのづから思しゆるすらん、とのみ思ひてなむ」とのたまふ。

⑤さばかりめざましと心おきたまへりし人を、今は、かくゆるして見えかはしなどしたまふも、女御の御ための真心なるあまりぞかし、と思すに、
(若菜下巻201～202頁)

光源氏は、明石の君の身分ゆえに「何ばかりのほどならずと侮りそめて、心やすきもの」と思っていたが、実際は⑤「心の底見えず際なく深きところある人」であるという。この、「人」表現による把握は、まさに明石の君の処世の仕方と言い当てている。明石の君は、本心の赴くままに行動することを、光源氏と「結婚」した時点から禁じられていたのであり、姫君が生まれてからは、さらに極まっていたといつてよい。そうした半生の生き様がおのずと「心の底見えず」と

されるような態度を持してきたことになる。また、光源氏と係わるなかで、また、明石の女御の実母として、「際なく深きところ」をますます磨いてきたことにもなる。先に典侍は、「あさましく気高く」ある人様を注視していたが、それと見合う把握である。「内裏の御方の御後見」と指示される明石の君は、まさに「心の底見えず際なく深きところある人」なのであり、明石の君の完成された生き方を示すのである。

光源氏は、続いて明石の君を③「(紫の上が)さばかりめざましと心おきたまへりし人」であったとするが、この把握は正鵠を得ていよう。紫の上にとつての明石の君は、まさにそうした存在であった。しかし、それは明石の君が姫君を生んでいるからなのではなく、姫君の実母であるかぎり物語内で待遇していかざるを得ず、そのために紫の上の対応の仕方を語ることによって存在せしめていたということになる。その必要性において、紫の上にとつての明石の君は、「さばかりめざましと心おきたまへりし人」なのであった。そして、その把握も「今は、かくゆるして」とあるように過去のもののなのであり、明石の君は「心の底見えず際なく深き所ある人」として完成されてあるのである。

おわりに

以上、明石の君をめぐる「…人」表現を追ってきたが、物語のそれぞれの段階において、この表現は微妙に変奏されてきたことが知られよう。「…人」表現は、物語表現の総体のほんのわずかな部分を占めるに過ぎないが、確実に主題的な人物造型に係わっているのである。

なお、明石一族という視点においては、明石の入道や尼君、及び明石の姫君などにおける「…人」表現も参照しなければならないが、明石の入道の用例を最後に上げて、この稿を終りにしておきたい。

参考：明石の入道に対する「…人」表現一覧

「供人」大臣の後にて出で立ちもすべかりける人	会・若紫巻277頁
「良清」なかなか法師まさりしたる人	会・若紫巻277頁
「入道」何ごとにも人にことになりぬる人	会・若紫巻207頁
「入道」田舎人	会・須磨巻203頁
「語り」ふる人	会・須磨巻231頁
「源氏」浦なれたまへらむ人	会・明石巻237頁
「尼上」ひがひがしき人	会・明石巻260頁
「明石」世を捨ててあかしの浦にすむ人	歌・若菜上巻100頁
「源氏」さもいたり深くさすがに気色ありし人	会・若菜上巻119頁
「源氏」あやしく恋しく思ひ出でらるる人のありさま	会・若菜上巻119頁
「源氏」わざと有職にしつべかりける人	会・若菜下巻160頁
「源氏」しばしかりそめに身をやつしける昔の世の行ひ人	会・若菜上巻120頁
「源氏」世を背きたまひし人	会・若菜下巻164頁

注(1) 拙稿(1)「中の君から浮舟へ―「…人」の表現性の継承―」(『昭和学院短期大学紀要』23、一九八七年三月)。

(2) 「源氏物語の「…人」の表現性―浮舟の心象に即して―」(『中古文学』39、一九八七年五月)。

(3) 「薫の失った女君―「…人」の表現性から―」(『太田善磨先生語国文学論叢』群書、一九八八年一〇月)。

(4) 「浮舟という人―「…人」の表現性から―」(『大妻女子大学紀要』21、一九八九年三月)。

(5) 「光源氏の女君―「…人」表現による造型―」(『大妻国文』20、一九八九年三月)。

(6) 「「帯木」巻における「…人」表現について」(『大妻女子大学紀要』22、一九九〇年三月)。

(7) 「葵の上と「…人」表現」(『大妻国文』21、一九九〇年三月)。

(8) 「末摘花をめぐる「…人」表現について」(『論集源氏物語とそ

- の前後1』新典社、一九九〇年五月）。
- (9) 「紫の上と「人」表現―物語第二部における―」(『源氏物語の探求』第十五輯、風間書房、一九九〇年一〇月)。
- (2) 本文は、日本古典文学全集本に拠ったが、句読点などは私に改めた。
- (3) 鈴木日出男「明石の君」(『別冊国文学・源氏物語必携Ⅱ』一九八二年一月)。
- (4) 通し番号の下は「人」表現をする主体、用例の下「会」は会話文、「地」は地の文、「心」は心内語、「歌」は和歌であることを示す。
- (5) 光源氏と明石の君においては、正当な結婚とはいえないこと、阿部秋生『源氏物語研究序説』(東京大学出版会、一九五九年四月)で明らかにされている。
- (6) 拙著『紫の上造形論』(新典社、一九八八年六月)の「七 明石の君物語との交渉」。
- (7) 小町谷照彦「藤原公任の詠歌についての一考察―古今的美学の展開として―」(『東京学芸大学紀要』第二部門 24号、一九七三年二月)。